

本日休診

見川鯛山



毎日新聞社

著者略歴

本名見川泰山。大正五年、栃木県安蘇郡植野村に生れる。植野小学校、県立佐野中学校の少年期をフナ釣りと言白とりに熱中しておくる。

先祖代々が医者で、その十八代目。祖先に、聖医、名医続出せるも、十六代泰雲、十七代泰蔵にて名門のホマレを終り、十八代泰山はついに“山医者”へと零落す。数少ない博士でない医者の中の一人。

ただし、狩猟、木登り、アユ釣りは鬼才。

住所、栃木県那須郡那須町大字湯本212

本日も休診

定価 六八〇円

一九七四年十二月十日 印刷
一九七四年十二月二十五日 発行

著者 見川 鯛山

編集人 桑原隆次郎

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

●一〇〇東京都千代田区一ツ橋
●五三〇大阪市北区堂島
●四五〇北九州市小倉北区船屋町
●八〇二名古屋市中村区堀内町

印刷 中央精版
製本 大口製本

目次

天下一医院 七

「侍医のカミ」由来 三

那須芸映社 七

便所 三

アユの季節 六

鱒 三

美人たち 五

鬼はアそと!! 冥
風 仝
いぬ 尖
牛乳 仝
岩魚 𠂇
ブラジャー 一三
モーター 一八
ガッカイ 仝
チャボ 𠂇
自動車 ㄥ

本日休診 二五

ストリーカー那須一号 二三

田植えのころ 二九

フクロの仲間 二三

モーニング 二九

源三のクマ 二四

うどん 二五

植野村赤坂通り 二六

体温計 二六

二匹 二七

中氣のめんどり 一七

たんぼ 一八

生簀 一九

八月一日夜 二〇

策 二一

鎌 二二

お化け 二三

装幀と装画 おおば比呂司

本日も休診

この本に出てくる人物はぜんぶ架空の人物です。

現存、故人をとわず、実存の人物と類似する点があっても、

それはまったくの偶然にすぎません。

ゴメンナサイ。

天下一医院

はじめに私は、少し自分のコトを書いておかねばならない。

といつても、私はお宅のご近所のかかりつけのお医者様と同じように、ごくありふれた開業医で、なんの変哲へんてつもない。身なりもキチンとしているし、礼儀正しいし、洋服も車の運転免許証も持ってるし、さほどひどい医者ではない。

だのに、この雑誌（『毎日ライフ』）がナニ故ユエに私を引っぱりだしてモノを書かせようとするのか、その魂胆こんたんはウスウス私にはわかつている。ソレハ係の人たちまでが、私をヘンな医者だと思いちがいでいるからだ。でも私は、ちつともヘンな医者ではない。見に来てもらいたいくらいだ。

私に云わせれば、自分のコトなんか書いたって面白くないから、今回はリッパな医者らしく、「高血圧症の治療体制」とか「単純性疱疹が胎児に及ぼす影響」とか、そういうイイことが書き

たかった。なのに、誰ひとり書いてみると云ってくれないのが不満である。ソレハ、私の患者さんたちばかりでなくヨソの人たちまでが、私をやブ医者だと馬鹿にしている証拠で、ホントに困ったことである。

だから私は、私が少しもヘンな医者ではないというコトと、世間で云うほどヤブではない証をたてるために、これから一生懸命に身の潔白を書き綴っていかなければならない。

私が思うに、世間で軽々しくそういう噂をたてるのは、私の容貌風体やウデ前のせいではなく、見川医院のタテモノのせいであろう。私自身はちっともオンボロだと思っていないのだが、みんながそう思ってるので困る。すこし小さくて、戸や柱がナナメで、上手に歩かないと腐った床板を踏みぬいて脚をスリ剝くだけの、タッタそれきしのことだ。

私は、日本では最高の医者であるにちがいない。というのは、見川医院が海拔千メートルの那須高原のテッペンにあるからである。そしてまた、イロイロ問題になる医院の建物が、豚小屋よりは少しマシで、牛を入れるにはやや小さすぎるタテモノで、ひと口に云えば間口四間、奥行き二間、総八坪の掘立小屋なのである。

だからコレも日本で、むかし世間では「天下一医院」と、陰ではそう云っていた。だが、開業して三十年もたつと、もう大っぴらにソウ呼んでいる。

しかしながら、新築したころは戸も柱も真ッすぐだったし、屋根も床板もキチンとしていた。

大工の六さんだって、「ゼニ惜しんだわりにヤ立派に出来た。大事に使えば五年や六年はモツ」と太鼓判も押した。

だが五年や六年たたないうちに、アツチコツチの具合が悪くなった。すると六さんが来てすぐに直してくれたが、太鼓判の期限が切れると、すっかりサジを投げて、「もう新しく建てけえねえと、イノチの保証は出来ねえぞ」と云われていた。だからアトは、なりゆきに任せてオンボロである。

しかし一度だけ、見るに見かねて六さんが来たことがある。入口の柱が曲りすぎて戸にスキ間があき、そこから猫だのイタチだの入ってくるので、彼が松板を三角形に切ってマチを入れ、ソコを塞いでくれた。でも十日もたたないうちに私がケツマずいて壊してしまい、この頃では犬まで入ってきて玄關口で寝ている。用心のためにはイイのだ。

見川医院では獣医は無免許だから、猫やイタチより、やっぱり人間の患者さんの方が多くくる。だからココには、ひととおりの待合室も台所も便所も診察室もあって、その四畳半の待合室にはトシ老いた看護婦の宮本さんが住んでいる。但しこの部屋は、昼から仕事に出て行く院長の部屋でもある。

つまりソレハ、待合室であり看護婦宿舎であり院長室である。私はユックリ出かけて行って四畳半の真ん中の切り炬燵に細長い腰を突っこんで、新聞読んだり漫画を見たりヒゲを剃ったり釣

り竿を修繕したり、イロイロする。

この部屋は私の設計がよかったので、とても便利に出来ている。私は炬燵に坐ったまま電話がかけられるし、ラジオにもテレビにも手が届くし、肘かけにもなる傍らの机の下や引出しには、ヒゲ剃り道具、切手ハガキ、画鋏、ホチキス、釣り竿修理用具、ミミズ、アカ虫、餅焼きアミ、その他いろいろの生活必需品がしまつてあるし、左手をのばせば火鉢の鉄ピンがとれて茶が飲め、即席ラーメンなんかアツという間に作つてしまふ。食い残しのソバと汁は、少し横向きに体をネジつて威勢よく捨てれば、ジャブツと台所の流し台にとどく。

といった具合に、便利なのである。だが、強いて難を云うならば、宮本さんのモモ引や肌着やズボンが、部屋に張りめぐらされた吊り紐からブラ下つて、院長も患者さんも首をちぢめて出入りしなければならぬし、根太が腐つてゐるためにソツと歩かないと畳がフワフワして、棚からボタ餅（患者さんが作つて持つてきてくれるホン物の）だの、大工道具やスキー靴やスコップなど、ドドドツと落ちてくることもある。だが、一度歩き方のコツをのみこんでしまえば、キケンはない。

はいい話、私はこのタテモノがとても気に入つてゐるので、六さんには悪いがもう少しコノママやつてみるつもりだ。

私が那須の山の中へ店を出して、もう三十年になる。そのころ生れた赤ン坊がホテルの社長に

なり、土地屋になり、物産屋や八百屋や饅頭屋になり、みんな立派なオトナになった。私に浣腸
されたり、オシッコ引っかけたり、引つ掻いたりした女の子たちが、美人の温泉芸者になって私
をカラかったり腿をツネったりする。そのうえヤツらは、私をヤブだと云う。それどころか家内
までソノ気になって、風邪をひくと近所のキ葉屋へ行つて、〇〇だの××××だの買つてきて飲
んでいる。「コレ、うちのより効くよオ！ お父ちゃんも飲んだら」と云う。そんなことヤツが
云わなくとも、私はとくに知っている。コッソリ買つて飲んでいるからだ。

だからクスリ屋のおカミさんが町じゅうに云いふらしている。

「風邪ひくと見川先生だつて買いにきて飲んでるよオ！」と。

だからよく売れるらしい。

私は医者はあるまいヤル気にならないが、アユ釣りだの鉄砲は涙ぐましいほど熱心だ。その方
では、有名になった。近くを流れる那珂川のアユは脂がのつて美味いし、診療所の裏山には雉も
ヤマドリも兎も沢山いる。だが、私の鉄砲はそういう速い獲モノには命中しないので、犬だの猫
だのネズミだのモグラだのを撃つ。私の往診用の毛皮のチョッキは、いろんな動物の毛がまざつ
てキレイだと、これだけはみんなが誉めている。

「侍医のカミ」 由来

晩飯のオカズは、熊の肉と、雪の野川で摘んだ香りのいい芹せりだった。

熊は私の仲間の猟師がマツ角沢で撃ちとった三十貫の大熊で、肩や腿のかたい肉ではなく、アバラ身の最上等のヤツだった。柔らかで、コクがあつて、ケモノ臭くて美味かった。仲間たちは桃色のこの肉をワサビ醬油でナマで食う。マグロみたいにうまいと彼らは云うが、私に云わせればソレどころではない。この馬鹿デカく、糞力くそちからのある大飯くらの山オヤジの肉は、やっぱり糞力のある童話じみた味と、石南花しよくはなや這松はまつやガンコウランの岩窟いはくの香りと、不敵な野獣の臭みがあつて絶妙である。

それなのに家内は、自分は文明人だからナマの熊なんか食べるのはヤダヨと云つて、鍋にした。シイタケと春菊と白菜を煮込んだ熊のスキ焼きは、これもまた大変うまかった。

「ホーラねえ、うまいでしょう。こうすれば、私だって少しは食べられる」

と、ヤツが一番ムシャムシャ食った。そしてまたでっかいアブラ肉を頬ばりながら云う。

「クマ食べると、アンタ、いつだって夜がうるさいんだから、困っちゃうホント」

「何がうるさいんだい」

伴^{きがれ}たちが訊いたが、賢母は答えてやらなかった。

以来、ウチの連中は、私にマツ角沢へいって一匹とってこいと云っている。私もいつかそうしたいと思っている。バリバリと毛がかたい大熊の皮でオーバー作って家内に着せたら、似合うかもしれないからである。だが今のところ、私は野良犬だの泥棒猫だのイタチだのモグラだのしか撃たないから、家内を着飾らしてやれないのが残念である。

「マ、もうちょっと待っててくれ。そのうち、ゴリラでも着られるようなデッカイ熊の皮とってきてやっから」

私がそう云っても、家内は気が進まないみたいだ。上流婦人の毛皮はミンクとかリスとか貂^{てん}などで、熊やイノシシの毛皮は婦人雑誌の広告には出ていないと云うのだ。それならば、東京へ行ってソレを買ってきたらどうかと云ったら、家内がフンと云った。フンとは何だと訊いたら、そういう毛皮は一着で三百万円もするのだから、私が一生かかっても稼げるはずがないではないかと云った。私はだから、最初から、熊にしろと云っているのだ。

いま私が着ている毛皮のチョッキは、まさか三百万円だなんてソナニハしなないと思うが、猫

だの犬だのモグラだの、いろんなケダモノをまぜこぜに縫い合せてあって、とてもあたたかく、柄が複雑で、イイ品物だ。もしよかったら、コレにもっとモグラやイタチを縫いたして、オーバー作って着てみたらどうかと云ったら、家内は返事しなかった。やっぱり婦人雑誌に出てるのが欲しいのだろう。

「山医者」というアダ名を私につけたのは、動物作家の戸川幸夫さんだった。日本列島動物分布図みたいな私のチョッキに興味を示したらしい。それを着て地下足袋はいて番傘背負って山を歩く恰好が、東京都千代田区一番町一丁目一番地あたりではアマリ見かけない姿なので、珍しがつてソウ呼んだのだろうが、彼もまた、私をやぶだと早合点したうえでの命名にちがいない。

山の私のナワ張りは十二キロ四方もある。そこには熊もキツネもムジナもイタチも住んでるし、天皇陛下も大臣も財バツも来る。そのほか百姓だの饅頭屋だのブリキ屋だの飲み屋の女だの、いろいろ住んでいて、患者層の厚いのも自慢である。

でもまだ、天皇陛下は私のところへ診てもらいに来ない。東京からホントウの医者連れて来るらしいのだ。天皇陛下はマアいいとしても、政治家だの財バツだのまでが陛下の真似をして、メッタに私の所へ来ないで町の病院へ行ってしまう。馬鹿なヤツラだと思っている。

私の掘立小屋の診療所へくる患者さんたちは、だからロクデナシの人夫だのブリキ屋だの飲み屋の女だの、そんなのしか来ない。そのうえこのロクデナシどもは芯が丈夫で、なかなか病氣